

「神に似ること」の様相

——プラトン『ティマイオス』を中心に——

土井裕人

I はじめに

「神に似ること」、すなわち神へと向かう人間の接近は、目指されるべき善き生に不可欠であるとプラトンの様々な対話篇に於いて主張されている¹。キリスト教神秘主義など後世へ深い影響を与えたこの主題では、人間の魂 (soul) のうちで不死 (debatos) かつ神的 (deios) なヌース (nous、知性・理性) に yoke、宇宙 (ouranos) に照応したはたらきが重要な役割を果たしている。拙稿は、人間が「神に似ること」について、宇宙や神との関係という観点から捉え、さらに後世へのその影響を垣間見ることとしたい。そのため、宇宙と人間を照応するものとともに論じ、思想史上の影響もとりわけ大きかった『ティマイオス』を取り上げる²。

具体的な考察に先立って幾つか留意点があるが、まず、似るべき「神」についての留意点から始めたい。プラトン研究では、「神」という概念規定の西方キリスト教的立場への依拠による混乱がしばしば生じてきたが、『ティマイオス』の神とは、第一にはデーミウ

ルゴス (δημιουργός) ³、すなわち「素材」を受け取り範型に基づく秩序づけをして宇宙を制作する神のことであり、少なくともキリスト教の神に相当するものではない。第二には、制作された唯一全体としての宇宙という神、第三には、恒星や惑星といった宇宙の諸天体の神々が挙げられる。

また、『ティマイオス』に於いては、人間という「神に似る」者も、神との間に質的断絶を持つ者ではなく、宇宙という神に類同する存在構造を持ち、デーミウールゴスや宇宙と類同した活動をする者であることに留意したい。もちろん、これは後のキリスト教によるプラトニズムにあつては、ヘレニズムとヘブライズムの相剋も絡んだ大きな問題となるが、拙稿では扱うことが出来ない。

II 『ティマイオス』に於ける「神に似ること」

本節では、『ティマイオス』のうち人間の制作が語られる箇所と人間の義務が語られる箇所から、人間が「神に似ること」の文脈を辿ることにしたい。

『ティマイオス』に於ける人間は、宇宙同様に魂と身体の共同体たる生きもの (ζῷον) であり、人間の魂は、宇宙の魂と同様に (Tim. 30B4c: 以下、略号のない場合は『ティマイオス』とする)、神的部分としてヌースを持つ。デーミウールゴスは、人間の神的魂を自ら構成し、宇宙万有の本性を示してから (41E2), 自ら制作した宇宙の天体としての神々に命じて人間の身体を制作させ、先の神的魂を結びつけさせた (42E7-43A6)。しかし、その際に、感覚 (αἰσθησις) と総称される外来の物体の運動と、身体内部の流れによって、人間はヌースの働かない愚かなもの (ἀνοῦς 44A8, ἀνόητος 44A3, 44C3) となってしまう、これは出生の度に繰り返されることになった。この愚かさとは「魂の病」であるが、病の恢復に寄与するのは、正しい世話 (ὀρθὴ τροφή 44B8) である教育 (παιδεία) や学課 (μάθημα) である。そして、学知を愛好し真の知を求め哲学 (φιλοσοφία) に励んだ者は、知の対象が不死かつ神的になり、特別に幸福 (εὐδαιμονία) な者となる。かくして、人間は神たる宇宙の模倣により本来性の恢復を果たし、神々から課せられた最善の生をまっとうしなければならぬ (90B6-D7)。

以上のように、『ティマイオス』の「神に似ること」とは、知的営為によって人間の神的魂・ヌースに本来の秩序性を取り戻し、その運動を宇宙の運動に倣って本来の在り方に戻すことである。従って、「神に似ること」について語るには、似る対象であり模範とすべき宇宙について、特にヌースを中心とする知的活動の側面から考察しなければならぬ。もちろん、ここでは『ティマイオス』に於いて宇宙と人間に構造的な照応があることに留意する必要がある。

III 宇宙の知的活動

——人間が「神に似ること」の根拠として——

本節では、『ティマイオス』の宇宙制作の展開 (27C1 sqq.) を辿りながら、宇宙の次元に於ける知的活動について、ヌースを中心に考察する。

「原因のうちで最善である (ἀριότερος τῶν αἰτίων 29A6)」「デーミウールゴスは、永遠のもの (το αἰδιόν 29A3, 5) 即ちイデアに注目して宇宙を制作した。善き (ἀγαθός) デーミウールゴスは、宇宙の身体制作に於いて制作するすべてが自身に極力似るように望み、無秩序な状態にあつた可視的であるものの全て (τὰν ὁσόν τι ὄρατον 30A3) を受け取り、宇宙の身体を構成するソーマ (σώματα 物体或いは身体) を秩序づけた。さらに、ヌースを持つことでソーマは立派なものとなるが、ヌースはいわば媒介となる魂なしにはありえないことを彼は考量し (30B1c: 以下) 宇宙が本性の上で最も善美な作品となるよう、ヌースを魂のうちに、魂をソーマのうちに結びつけて宇宙を制作した (30B4c: 以下)」。こうして、宇宙は可知的对象 (νοητόν) である生きもの全てを含むように、「ヌースにより捉えられるものの中で (νοούμενα 30D2) 最も立派な全体的生きものをモデルに制作され、最も相応しい運動として循環運動を与えられた。

以上『ティマイオス』34A7までの検討から、ヌースの関わる二つの論点が提示されよう。第一点は、宇宙のモデルが可知的对象(すなわちイデア)であるがゆえに、デーミウールゴスの知的活動には

それを捉えうる何らかのヌースが関わっているという点である。第二点は、善美な宇宙はヌースを持ちヌースに相應しい循環運動をするという点である。もちろん、ヌースについては、デーミウールゴスの次元、宇宙の次元、人間の次元という三段階を認めなくてはならない。

第一の論点、すなわちデーミウールゴスの知的活動を考察するにあたっては、ヌースに対するデーミウールゴスの位置づけについて、諸解釈を検討することから出発したい。デーミウールゴスはイデアすなわちヌースの対象を範型にして、知的活動に基づき宇宙を制作したと語られているため、デーミウールゴスとヌースとの関係を明らかにする必要があるからである。

古来より『ティマイオス』解釈の伝統では、様々な異同を含みつつも基本的には、デーミウールゴスがヌースとして考えられてきた。例えば、プロティノスの語るヌースは、『ティマイオス』のデーミウールゴスと必ずしも完全には一致しないが、万有を制作すると語られている。現代の解釈には、デーミウールゴスを「実在」する者とは見なさず、神的ヌースとして考える立場がある。例えば、『ティマイオス』の名高い注釈書を著した E. M. Cornford は、あくまでデーミウールゴスは象徴 (symbol) であるから字義通りに捉えられべきではなく、デーミウールゴスは神的ヌースである、と論じている。他にも、宇宙の運動という「動態的構造」から考えた場合、宇宙のヌースとは宇宙を秩序だつて動かす運動原理・運動附与者であつて、その意味で宇宙のヌースがデーミウールゴスであるとい

う、鈴木照雄の立場が挙げられよう。しかし、こうした現代の解釈の立場に基づくと、万有の在り方という「静態的構造」の側面から考えた場合、範型と似像との間の関係を制作の目的論的構造に投影したミュートスの表現がデーミウールゴスであつて、デーミウールゴスは「睿智的」「ヌース的」「秩序」へ消えてしまうとすると、いわば「デーミウールゴスは擬人的表現」という解釈が導かれる。そのため、この解釈には、デーミウールゴスを神話的イメージに還元してエイコース・ミュートスやエイコース・ロゴス（ありそうな言論・物語）の所産と断言している感が否めない。しかし、宇宙万有にはそれを制作した神がいるという、『ティマイオス』を特徴づけるモティーフこそがキリスト教思想などに重大な影響を及ぼしたことを考え、そこに視点を置く限りは、デーミウールゴスは「積極的」に評価されるべきと思われる。

従つて、『ティマイオス』のデーミウールゴスの「実在性」を認めつつ、同じ後期に属するとされる『ピレポス (Philobos, 略号: Phil.)』の「無限・限度・両者の混合・混合の原因者」という四大別 (Philobos) を田中美知太郎に倣つて援用し、デーミウールゴスについては、『ピレポス』に於ける宇宙の混合の原因者であり宇宙の秩序であるヌースとして考えるのが妥当であろう。従つて、テキスト上の制限を自覚しつつ、宇宙の制作者として、制作した宇宙のヌースの上位に立つ、いわばメタ宇宙的ヌースとしてのデーミウールゴスを考えてよいと思われる。しかし、『ティマイオス』のデーミウールゴスと『ピレポス』に於ける宇宙万有の混合の原因者という両者は、完全に重なり合うというわけではない。『ティマイオス』のデー

ミウールゴスは、宇宙全体に秩序や法則性として遍在する (Phil. 304a) ヌースのうち、「制作」の局面が強調されたものと考えられる。

さて、先述のように、デーミウールゴスの知的活動とは、イデアを範型にして、善くあるようにという意図のもとで宇宙万有を制作することである。これを、能知たるヌース⇨デーミウールゴスと所知たるイデア⇨可知的対象との関係として考察することにより、デーミウールゴスの知的活動の様相に迫りたい。

この関係の解釈については、前者と後者を同一とみるか別々とみるか諸家の解釈が分かれるが、それぞれの見解を瞥見してみよう。

『パルメニデス』やアレクサンドリアのフィロンを引きながら、両者を別々のものとして取り上げている論考として、A. E. Taylor による浩瀚な『ディマイオス』注釈書が挙げられる。対して E. D. Perl は、伝統的解釈は両者を同一視しており、別々に見なしたのは近代以降であると Taylor を「批判」して古代の解釈への回帰を提示する。また、テクストから根拠を得るのが難しいと慎重な態度をとりながら、所知と能知を同一のものとして見る田中美知太郎の立場もある。確かに『ディマイオス』では、所知と能知は、同一と明言されていない。しかし、Perl の引用する 92C7 の「可知的対象 (イイデア) の似像である感覚される (宇宙とご) 神 (εἰκὼν τοῦ νοητοῦ θεῶς αἰσθητός)」や、田中の引用する 29B3 の「デーミウールゴスはすべてものが最大限に自分自身に似ることを望んだ (μάχεται ἵνα ἑαυτῆ ἐβουλήθη γενεῖσθαι ὁμοιωτάτα ἑαυτῷ)」とごう箇所をもつて、デーミウールゴスと可知的対象の両者が本来一致するものという解釈が導かれてよいと思われる。そこで、所知と能知の各々

は、それぞれ存しつつも同一のものである、という解釈を採ることとしたい。以上から、デーミウールゴスたるヌースによる可知的対象への知的活動とは、最善を企図した「再帰的」考量であり、デーミウールゴスは宇宙の魂を善き自身に極力似せて善きものとするべく (29B3)、自身と同様に自らを思惟するヌースを持つものとして制作したと考えられる。

第二の論点、すなわち宇宙のヌースの運動については、宇宙の魂の制作 (34A sq.) を辿りつつ考えたい。

宇宙の魂は、デーミウールゴスの考量に従って (34A-B) 「有 (ὄντῃα)」と「同 (ταυτῶν)」と「異 (ἄλλεποδ)」の混合から、比率に従い分割・結合されて制作された (37A2-4)。この制作により、右回りの「同」の運動と、左回りの「異」の運動が生み出され (36B6-G)、主導権を持つ前者は、分割されない一つの運動として天球の恒星の日周運動に相当するものとなり、後者は七つの軌道に置かれて惑星の運動となった (38C7D1)。これら二つの運動は、宇宙の魂のうちでいわば自己還帰的に循環運動を行うものである (37A5)。そして、「変わらず真として成立するロゴス (λογος ὁ ὁ κατὰ ταυτῶν ἀνήθης γυρογίγνευος 37B3-4) が「感覚的对象 (αἰσθητῶν) に関わり「異」の軌道の正しい動きによって運ばれる場合には、确实で真なる思いなし・ドクサ (δόξα) が魂に生じる。ロゴスが思考対象 (λογιστικῶν) に関わり「同」の円の円滑な運動によって運ばれる場合には、ヌースとエピステーメ (知識) が完成される (37C2-3)。ここでは、宇宙の知的活動には「同」の循環運動と「異」の循環

運動とがあり、またこの両者が可視的な宇宙の天体が行う運動として顕現することを確認しておきたい。

IV 人間が「神に似ること」の宇宙論的根拠

前節に於いて、『ディマイオス』の宇宙論に於ける知的活動には、①善き制作を目指すデーミウールゴスの知的活動と、②宇宙そのものの知的活動という二つの局面があることを述べた。これは、同篇の宇宙論とりわけ宇宙創造論に於いては「知」が肝要であるとともに、人間が「神に似ること」にとつても「知」が深く関与するということに他ならない。

従つて、本節では、①についてはデーミウールゴスの知的活動と人間との関係、②については宇宙の「同」の運動と「異」の運動の人間への関係に注目し考察する。そして、人間が「神に似ること」が、①デーミウールゴスによる宇宙制作の構造に類同し、②ドクサからヌースへ、つまり感覺的对象を捉えることから叙智的对象を捉えることへの移行により可能になると明らかにし、その宇宙論的根拠を考察したい。なお、後世への影響に関して特に問題となるのは後者であるため、②の架橋の問題について詳述する。

①については、これまでの考察から、宇宙制作にあたって自己思惟を行うと考えられるデーミウールゴスと、外部を持たないゆえに自らが自らを循環的に思惟する全体宇宙に対して、外部の対象を捉えて (ΣΕΒΑΣΤΑΝ) 宇宙同様の循環的な知的活動を行い「神に似ること」を目指す人間が、一種の照応する構造にあると考えられる。

また、知的活動については、人間は宇宙に、宇宙はデーミウールゴスに、と互いに後者は前者に根拠を持つていると考えられる。すなわち、人間が「神に似ること」は、宇宙だけではなくデーミウールゴスの思惟にまで達する射程を有している。このようにして、「神に似ること」はデーミウールゴスによる制作という、宇宙の存在の源泉にまで遡る根拠を持つのである。

この傍証として、身体の病とその治癒についてみてみよう。身体の病とは、火・空気・水・土の四大元素により構成される人間の身体が、元素間の調和を失った状態に陥ることであり (ΣΑΥΣΕΒΤ)、この状態ではソーマは無秩序な運動をしている。身体の病の治癒とは、魂の世話と同様に万有の形 (εἶδος) を模倣することによって行う世話であり (887, 88D)、生成物の養い親である「場」(Χῆρος) の秩序ある運動に倣うことである。万有の母になぞらえられる「場」(ΣΟΦΙΑ) は、宇宙の制作前に於いて、未だ秩序づけられていない状態であった「四大元素の原物質」によって無秩序かつ不規則な運動を持つ状態にあった (ΣΕΒΑΣΤΑΝ)。この状態は身体が病の状態にあって、元素間の調和や運動の秩序性を失っている事態に相当する。制作以前には善美とはかけ離れた状態にあったソーマは、デーミウールゴスのはからいにより、可能な限り最も善美で知に与るべく構成されたが (ΣΕΒΤ)、この構成時に「場」とソーマの運動も秩序あるものにされたのは言うまでもない。従つて、身体の病の治癒にあつて模倣すべきは、デーミウールゴスによる四大元素の秩序づけとならう。それゆえに、人間のソーマに対する秩序の回復である身体の病の治癒は、デーミウールゴスによる宇宙のソーマの秩序づけ

に照応して身体の治癒の根拠を持ち、彼の知的営為の反復となることとで有効なものたりえると考えられる。以上のように、デーミウールゴスによる宇宙制作は、人間が「神に似ること」に原範型としての宇宙論的根拠を与えていると考えられる。

次に、②については、人間の知的運動が宇宙の知的運動へどのように向かうのかを考察するため、「同」の運動と「異」の運動との間に知的活動としての差異を認めるか、すなわちヌースのはたらしきを両方の運動に認めるかどうかという問題を考えたい。もちろん、これには差異を認める解釈と認めない解釈とがある。前者の解釈の例としては、古くはプルトルコスを挙げる事ができる。彼は知的原理として、「同」の循環運動により普遍的なものに向かうヌースと、「異」の循環運動により個別なものに向かう感覚を区別する。対して、後者の差異を認めない、というよりむしろ積極的に区別しない解釈として、現代のものであるが、矢内光一の論考が挙げられる。では、どのような解釈を採るべきか、まず宇宙の場合から考えたい。先述のように、宇宙に於いては恒星の日周運動に対応する宇宙の「同」の循環運動が、惑星の軌道に対応する「異」の循環運動に対して主導権を持っている (36C7D1, 39A12)。さらに、前者の運動がヌースに関わっていて、後者はドクサにとどまると考えられた。これについて異説は考えられるものの、いま述べた解釈で考察を進めたい。この「同」と「異」の循環運動の区別は、恒星の運動が、様のものでして観測されるのに対し、惑星の運動は「彷徨する星」という語源が示すように、一見すると同一性に欠けるものとして観

測されることに対応している。前者の恒星は、同一の対象について同一のことを考えるという全体宇宙の知的活動に対応する循環運動と、全体宇宙の「同」の循環運動により支配されていることに対応する前進運動の二つのみを持つ (40A8-B2)。しかし、単純に「同」の運動についてのみヌースの関わりを考えてよいのだろうか。「異」の原理に与る諸惑星は、宇宙を範型により近づけるため、範型の持つ永遠性の似像である時間が生み出されるようにと、デーミウールゴスにより制作されたものである (38C2)。それゆえ、諸惑星の「異」の運動は秩序を持っており (36D67)、また諸惑星が調和的に配されたまた神々と呼ばれている (40C3 etc)。また、「同」と「異」のそれぞれの循環運動が神的であると語られていることから (44D1, 85A6)、諸惑星もその運動もヌースに与っていることは確かである。以上から、宇宙の次元では「同」と「異」の循環運動が両方とも神的な知としてのヌースのはたらしきに関わっていると解することができるといえる。

では、人間の場合はどうか。この次元での両者の異同を端的に語るのには、人間の魂がデーミウールゴスにより旋を告げられる AID8 sq. である。同所では、騒々しくロゴスに与らぬ ($\delta\lambda\omicron\gamma\omicron\varsigma$) 四大元素からなる塊を「同かつ」様の循環運動に ($\tau\eta\tau\alpha\upsilon\tau\omicron\upsilon\kappa\alpha\iota\ \phi\omicron\lambda\omicron\upsilon\upsilon\ \tau\epsilon\pi\omicron\delta\omicron\upsilon\ \alpha\zeta\text{C45}$) 巻き込んでロゴスにより統御し、最初にして最善の相に至るまで輪廻転生の苦しみがやまないと語られているため、人間にとつては「同」の循環運動の優位性があると考えられる。また、39B7-C1では、デーミウールゴスが太陽を点じた目的について、人間などが「同」かつ「同」様の回転運動から学んで数を

分ち持つことにある、と語られているので、人間から見た場合、宇宙の運動は「同」の方に優越が与えられているように思われる。

以上のように、「同」と「異」の循環運動について、知的運動としての差異を認めるかどうかは、どちらの見解にも論拠がありうる。しかし、「異」の軌道に属し、夜と昼という単一で最も知的な円運動の周期 (39C1-3) を持つ太陽の運行から、どうやって人間は宇宙の「同」の運動を学び取ることができるのだろうか、という疑問に答えることから「同」と「異」の問題への拙論なりの解釈を導きたい。これは、ソーマの対象に対する感覚と、ヌースの対象に対する知的はたらきとの間で架橋がどのように行われるかという問題でもある。

「同」と「異」に関わらず、宇宙の循環運動そのものは、魂の不可視的運動であり、可視的であるよう火から作られた (40A23) 天体に媒介されて顕現する。人間は、可視対象と同族の火を内在する (40B4) 視覚機能によって天体に顕れた運動を捉え、宇宙の秩序をまずは昼と夜から見出して数を案じ、さらに万有の本性を探究し哲学に至ることで思考の循環運動を立て直すことができる。しかし、「同」も「異」も混乱した人間の魂の循環運動は、おそらく最初から「同」の思考に与えることはできず、太陽の運動という最も明白な天体の運動を視覚することから段階的に高度なものへ引き上げられていくしかない。従って、人間の知的運動については、感覚からヌースへとという上昇が考えられる。やはり、神々たる天体に関わりを持つのであるから、「異」の循環運動も「同」の循環運動ともに神的運動でありヌースに与っている。しかし、「異」の軌道は

「同」の軌道に支配されるときにも、「同」に寄与するものである。感覚のみにとどまるならば、視覚だけを用いる天文学者が単純浅薄のゆえに鳥の類に転生することからわかるように (91D6E1)、真の知を得て「神に似ること」は実現できない。従って、「同」も「異」も本来は神的でヌースに関わるとは言っても、人間は「異」だけではなく「同」の循環運動に与るところまで達しなければならぬ。そして、宇宙の軌道が人間の軌道に立て直しの基礎づけを与えるときにも、二つの循環運動による知的活動の間での上昇が、「神に似ること」を可能にしていると考えられる。

では、なぜ「神に似る」ための知的活動として「同」と「異」という二つの循環運動が問題になるのだろうか。この問いへの答えは「ディマイオス」から直接には得られないが、後のプラトニストたちによる解釈から極力接近したい。まず、循環運動には中心が不可欠である。ここから、人間が「神に似る」過程が、宇宙全体の円運動に他ならない循環の中心に向けて、人間の循環運動の中心を立て直すという「中心への帰一」となっていると想定できよう。もちろん、ここでの中心とは畢竟、善かつ、なる神と考えられる。従って、その唯一の中心に関わる回転運動には、意味的に、中心へ、すなわち「多」から「一」への統一に向かう求心的運動と、中心から展開する、すなわち「一」から「多」への分化に向かう遠心的運動という、相補的に対を成す二つの運動を想定できる。これを「ディマイオス」に於ける宇宙の「同」と「異」の知的循環運動にあてはめると、前者には分割されない「一」への統一という睿智的なものへの上昇としての方向性が、後者には惑星の軌道として分割され

「多」へ分化するという感覺的・現象的なものへの顕現という方向性が考えられる。つまり、『ティマイオス』の「神に似ること」とは、「多」なる諸惑星の可感的運動として顕れて真なるドクサをもたらす原理としての「異」の運動を視覚して、それらの中心を見出して総合するとともに人間自身の循環運動の中心を帰一させ、「一」なる恒星の不可視な「同」の運動の把握により、その知的運動の中心である神に求心的に達する愛智の過程、と発展的に解することができる。この解釈はプラトンのうちから直接的に得られるものではないが、その一端が「ティマイオス」の「神に似ること」の影響として後のプラトニストたちに見出されるものである。

V まとめと今後の展望

ここではさらに、『ティマイオス』の「神に似ること」がもたらしたと考えられる後世への影響を幾つか挙げ、今後の展開への布石としたい。

第一に挙げられるのは、新プラトン主義の「祈り」への影響である。新プラトン主義では、『ティマイオス』の知的活動は善一者への還帰として位置づけられるが、ここで「神に似ること」は、善一者・神への接近という色合いを帯びてゆく。例えば、プロクロスは「ティマイオス注解」で、善一者へ還帰することは、帰還のはたらしきを持つ思惟によって、世界創造の過程を逆方向に追体験することであり、この還帰に於いて祈りが不可欠であると主張する。「魂の父が魂に植え付けた神々の印によって」(νοσηθηθησιν)、祈りは帰還に際して大きな効果を持つ。なぜなら祈りは神々の善行を自らに引き

付け、祈りは祈るものと祈られる対象を合一させ、神々の精神を祈るものと結び、完全な善を所有する神々の意志を、その豊かな恵みの贈与へと動かすからである」と語られている。もちろん、ここではヌースのはたらしが不可欠である。また、擬ディオニュシオス・アレオバギテス『神名論』の場合、祈りとは神に未だ「現存」していない人間を神に現存させるものであり、思惟にとつて不可欠なものであり、また思惟を開始させ完成させるものである。つまり、神への祈りとその名への思惟が、神の発出と帰還に人間を現存させ、神への合一へ向かわせるのである。

次に挙げられるのは、シンボルを通じた感覺・ドクサからヌースへの段階的上昇という、擬ディオニュシオスに表れるモティーフである。明確にはないにせよ、『ティマイオス』の「神に似ること」に於いては、感覺的对象の把握からヌースへ至る過程が見出された。「天上位階論」に於ける神への上昇は、人間がヌースによつて神からの光の贈り物を受け入れ、神のはたらしを助ける者として何よりもよりいっそう神に似ることであり、上昇を導く天使の位階の開示をシンボル (symbol) によつて受けることで達成されると語られている。この天使は『ティマイオス』の天体同様に神性への関わりが深い火の属性を持ち、人間の感覚に訴えかけて神の方へ導く。すなわち上昇の媒介としての天使という中間存在者に、シンボルの語が用いられているのである。ここでは、『ティマイオス』に萌芽として顕れたモティーフが、明確なヒエラルキー階層の世界として結実するとともに、キリスト教の天使に翻案されて継承されたと言えるだろう。

こうした、『ティマイオス』の「神に似ること」の後世への影響については再論を期して、拙稿を閉じることとしたい。

注

- (1) 有名なのは『ティマイテトス』176Bと思われるが、他にも『国家』X.613B1や『法律』IV.716D2が挙げられる。『ティマイオス』自体には *quatuordecim* という言い回し自体は表れないものの、神として語られる万有(宇宙)に人間が似るという内容は、90D45に見出される。なお、以下の論文にあるまともを参照。金井多津子「プロテイノスにおける *quatuordecim* の意味」『倫理学』第四号、一九八六年、二二—三三頁。また *quatuordecim* と『ティマイオス』の関わりについては、D. Sedley, "Becoming like god in the *Timaeus* and Aristotle," in: T. Calvo and L. Brisson (ed.), *Interpreting the Timaeus-Critias*, 1997, Academia Verlag, pp. 327-328.

(2) 従って、拙稿の方針として、他對話篇との整合性についての言及は最小限にとどめ、後世のプラトニストによる解釈との関わりに力点を置きたい。

(3) 『ティマイオス』の宇宙方角を制作する神は、常にデーミウールゴスと呼ばれているわけではないが、拙稿ではデーミウールゴスと総称する。

(4) 病とその治癒については、拙稿「プラトン『ティマイオス』に於ける治癒」、『宗教学・比較思想学論集』第三号、二〇〇〇年、一一—二頁を参照。

(5) 「神に似ること」は、知的活動として人間の一部分にのみ関わるのではなく、すぐれて全体的なものである。生きものは、全体として均斉が取れているときに善美であるので(87C4D)、健全な人間の魂は、身体をもよく世話して人間全体の調和・均斉を表現すると考えられるからである。

(6) 「考量」とは、通常は「推理」などと訳される *symplois* の訳語である。不確実ではない熟慮であるというニュアンスを強調してこのように表記した。なお、ヌースとソーマの間に魂が入るべきことは、『ヒレポス』30C910でも語られている。

(7) この「入れ子構造」は、物理的な多層性をもって宇宙が構成されていることを示すのではなく、支配—被支配のヒエラルキーを示している。例えば、ヌースを持つ宇宙の魂は、宇宙の身体の中に置かれたとともに身体全体を貫いて引き延ばされ、宇宙身体の外延まで至って天球を動かしている(34B3-4, 36E2-3)。

(8) もちろん、ヌースをデーミウールゴスと同一視しない例として、キリスト教からの解釈もある。アウグスティヌスは、『ティマイオス』のデーミウールゴスはキリスト教の神であり、ヌースは神の智慧(*sapientia*)である術知(*ars*)であり、神は言葉という術知により世界を創造したと解釈する(『神の国』第一巻、第21章)。「制作する神—制作手段としてのヌース」というこの解釈は、善美なものを制作する原因についての「ヌースの助けを借りて (*meta voutheia*)」という記述や、「ヌースを通じて (*dia voutheia*)」制作されたものという記

述に適合するようにも思われるが、デーミウールゴスをキリスト教の神と同視する根拠は「ティマイオス」中には見出せない。

(9) 種山恭子「『ティマイオス』のδῆμιουργός像再考——特に「エンネアデス」II.9におけるプロティノスとの対比で——」『古代哲学研究』XVII、一九八五年、一四頁を参照。

(10) 『エンネアデス』V.1, 8, 5やV.9, 3, 24-26など。しかし、彼の解釈は「ティマイオス」への対応を明確に見出だせないの、参考にとどめるべきであろう。デーミウールゴスとしてのヌースの在り方については、ヌースが現象界に対する原型である、と原因性に重点が置かれていて、思惟したうえで万有を制作するという意味での原因性は認められていない。従って、ヌースの不動性を主張するプロティノスにとっては、「ティマイオス」のデーミウールゴスによる考量(30B4, 34A8 etc.)は、「あたかも」と表される、種の比喩であり(VI, 8, 17, 1-4)ヌースに相応しくないと考えられている(VI, 7, 1, 28-29 etc.)。田子多津子「ヌースとデーミウールゴス——プロティノスの「ティマイオス」解釈の一断面——」西洋古代末期思想研究会(編)『カルキデイウスとその時代』慶應義塾大学言語文化研究所、二〇〇一年、四七—五七頁を参照。

(11) F. M. Cornford, *Plato's Cosmology*, 1937, Routledge, p. 37.

(12) *ibid.*, p. 39.

(13) 鈴木照雄『ギリシア思想論放』二玄社、一九八二年、一二七—一四三頁。

(14) 田中美知太郎『プラトンII 哲学(1)』岩波書店、一九八一年、七二頁。

(15) A. E. Taylor, *A Commentary on Plato's Timaeus*, 1928, Oxford, p. 81.

(16) E. D. Perl, "The Demiurge and the Forms: A Return to the Ancient Interpretation of Plato's *Timaeus*," in: *Ancient Philosophy* 18, 1998, p. 81, p. 91.

(17) 田中、前掲書、一七二頁、一七三—一七四頁。

(18) なお、前述のように、プロティノスはデーミウールゴスの考量白体を否定し、またデーミウールゴスの思考(δύναμις)をもE.9(「グノーシス派に対して」)で否定する。思考という語自体は「ティマイオス」の宇宙制作の場面で登場するため(38C3b etc.)、デーミウールゴスの自己思惟については、δύναμις系(δύναμις)が持つ意味の圏内にδύναμιςやλογισμόςを含める「ティマイオス」のプラトンと、δύναμις系の語にのみ「直知」のはたらきを認めるプロティノスとの間に、用語法の違いがあることに注意しなくてはならない(参考：種山、前掲論文、四—五頁)。プロティノスのこの峻別については、種山の示唆にあるように、「国家」の「線分の比喩」に於ける、間接知としてのδύναμιςと直接知としてのδύναμιςとの区別を考えに入れるべきと思われる。

(19) 一般的にプラトンに於いては、ドクサは生成流転する現象世界の可感的事物が対象であるため確実な知ではありえない。

(20) ここで、素朴に「同||ヌース」で「異||感覚」であると考へ

ることは、やはり安直と思われる。Cornford が指摘しているように (Op. cit., p. 96)、「ソピステス」の類の問題を考慮した上で、ディアレクティケーに於ける分割の問題も含めながら「同」と「異」についてさらに考察することが必要であろう。

なお、採っているテクストの読み方 (p. 95) や注釈 (p. 97) から考えると、彼は「異」の運動に感覚が結びついていると解するようである。なお、この箇所に於ける諸家のテクストの読み方を解説したものとして、L. Brisson, *Le Meme et l'autre dans la Structure Ontologique du Timee de Platon*, 1974, Klincksieck, pp. 340-352.

- (21) 「宇宙生成以前」については、それを字義通りに捉えるかどうかだけではなく、時間の制作、魂動因説、悪の起源といった諸問題とも関わって、「ティマイオス」解釈上の大問題となってきた。土屋睦廣「プラトンにおける悪と物体の問題——『ティマイオス』の宇宙生成論をめぐって——」、『倫理学年報』第四〇輯、一九九一年、一九—二四頁を参照。
- (22) *Mordia*, 1024E10-F1.
- (23) 矢内光、「プラトン『ティマイオス』における宇宙と人間の存在構造」、『横浜国立大学人文紀要哲学社会』二九号、一九八三年、四九—六四頁。なお、二つの循環運動に特に差異を見出さないこうした見解は、宇宙の「同」と「異」の循環運動について使い分けを行う例が「ティマイオス」に於いて少数であることから導かれていると考えられる。また、Sedley も「神に似ること」について、宇宙の二つの循環運動に言及している

が、「同」と「異」との違いを述べてはいない (Op. cit., pp. 328-330)。

- (24) これは、人間の知的運動が出生時に混乱してしまうことによつて、他の六つの運動(上・下・前・後・左・右)のうちを無秩序に彷徨うことと対比される (33B2-5)。
- (25) このことは、宇宙も人間も魂は「同」と「異」の両方を含んで制作されており、その知的活動には「同一」と「差異」の認識が共に不可欠に伴うことから傍証されよう。
- (26) 「国家」の太陽の比喩に於ける太陽とは違い、「ティマイオス」で語られる太陽には、存在を与えるという意味合いは直接的にはない。
- (27) プルタルコスはその知とドクサの間に表象と記憶を置く (Op. cit., 1024E3-4)。プロティノスも、外部から受けた感覚的事柄の表象について、表象のはたらきは表象する者にその事柄の知識を与えると論じ、表象のはたらきを直知するヌースのはたらきの下に位置づけている (IV, 4, 13, 12-13)。彼らの見解は、アリストテレスの『記憶と想起について』の議論を踏まえたものである。
- (28) 474A7からは、昼と夜↓月と年↓春分・秋分・夏至・冬至という具体的順序が読みとれる。しかし、感覚からヌースへの上昇は、本来「魂の向けかえ」ともいうべき大転換を伴うはずであるが、『ティマイオス』にはそのような記述はない。
- (29) 「中心」については、『ティマイオス』は専ら宇宙全体の形状について語っており(宇宙の制作時に魂の中心と身体の中心が

合わせられたこと：3891、宇宙の球形性と中心との関わり：33B4.5, 62D1.4, etc.）、循環運動の中心については特に言及していない。しかし、更に後期の対話篇「法律」十巻では、「ティマイオス」との類似が指摘される文脈のうち（E. B. England, *The Laws of Plato*, 2 vols., 1921, Oxford, vol. 2, p. 478）、898A4に於いて運動の中心が明確に主張されている。なお、この直後の898B8では、中心を持たず同一性の無い運動が無知と同族であると語られている。このような、上昇に於ける「中心」の問題は、たとえば擬ディオニュシオスなどでは重視されるようになる。

(30) 例えば、擬ディオニシオスは「天上位階論 (*De Coelast Hierarchia* 略号: CH)」第15章6節340Aで、神に関する隠れた事柄を開示する天使の永遠の回転運動が、同一の善すなわち神の周りを廻ると述べている。なお、擬ディオニシオスのページ数と段落は、Migne版に従う。

(31) これはもちろん、宇宙創造の再認識と宇宙創造の根源への復帰という、新プラトン主義的な発出と帰還のモチーフと重なり合う。

(32) 例えば、擬ディオニシオス「神名論」(7, 2, 308, 868B-C)は、人間の魂が、求心的な円環運動により多を一にまとめる力を持つと示唆している。また、フィチーノは『ピレポス注解』15章で、*intellectus* が本来有する一性によりまず「一」を指すも、多に対する知覚に進み、その結果を集め定義を作って、「へ戻るといふ、…と多の円環について述べている。なお、「一」

と「多」については「ピレポス」などから詳細に検討する必要があるのはもちろんのことである。

(33) 熊田陽一郎「ディオニシオスにおける祈りと思惟」『中央大文学部紀要、哲学科』第二九号、一九九四年、一三―一八頁を参照。

(34) *In Platonis Timaeum commentarii*, 210, 30, なお、ページ数と行数はDielh版校訂本に従う。

(35) *ibid.*, 210, 30-211, 7, なお、邦訳は熊田、前掲論文、一八頁による。

(36) もちろん、「一」ここでは「神」概念が「ティマイオス」と相違して「多」を留意しなくてはならない。

(37) CH 4, 2, 165B.

(38) CH 15, 2, 329C.

(39) CH 1, 2, 121B.

(2007・ひろと 筑波大学大学院博士課程哲学・思想研究科)